

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

ホームページ

<http://shakaisushin.cool.coocan.jp/>

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話/FAX(03)32299153・67  
振替 0010019158431 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 (郵送) 350円・メール 175円

6カ月前納制

## 〈もくじ〉

### ■巻頭言

エルダ―社員の低賃金を考える

国労上野反合研……2

長澤運輸事件「五・二三」東京地裁判決に関連して

向坂逸郎・岩井章を訪ねる

「弥次喜多道中」第四弾 信州松本編(上)

蓑輪 泰臣……3

◇資料 お菜洗ひ―(尋五) 岩井 章

思想闘争をもっと大きく、ていねいに

滝野 忠……6

―現代社会の政治と労働運動③―

デフレとは慢性的恐慌である

伊勢 太郎……8

英国、EU離脱交渉のゆくえ

編集部……9

―ヨーロッパ分離・独立の背景と本質③―

読者からのおたより……

11

# 旬刊 社会通信

NO. 1222

二〇一六年八月一五日号

二〇一六年八月一五日発行  
(毎月一日・二五日二回発行)

## エルダー社員の低賃金を考える

長澤運輸事件「五・一三」東京地裁判決に関連して

エルダー社員制度（JR東日本の定年後再雇用制度）は、JR東日本が五年間の有期雇用契約で再雇用し、原則としてグループ会社等へ出向を命ずる、というもので、労働協約の締結に至らないまま、「エルダー社員就業規則」により二〇〇八年から実施されている。

## エルダーの年収は激減、委託職場での責任と業務量は増大

エルダー社員制度の①労働時間は、基本的に一日七時間三〇分、徹夜勤務もあり得る（フルタイムの場合）、②基本賃金は、社員の退職時の等級に応じた区分、在勤地に応じた区分により、フルタイムの場合、現行月額一五万五〇〇〇円（退職時係職で東北・新潟・長野の場合）と二一萬三九〇〇円（同主幹職で東京の場合）と大きな格差がある。新橋・上野支部の国労組合員の場合は、一七万八三〇〇円と一十九万六一〇〇円といったところだろうか。なお、二〇一三年以降、年金（報酬比例部分）支給開始年齢の引き上げに伴う措置として、「調整特別措置」が新設されたが、同時に主務職・主幹職等には「調整手当」（七〇〇〇円・一万五〇〇〇円）という上の方だけに手厚い措置が新設された（国労東日本「業務連絡報No.一〇八四」）。

国労東日本本部は制度発足前から、「定年年齢の段階的引き上げ、六五歳定年制」と「出向会社に関する本人希望」を要求の最優先課題としていたから、賃金については、「基本月額が低い。大手私鉄の場合は、最低保障月額が二一万円。助役職と同じ仕事をしているのに何故賃金格差を付けるのか」などが交渉で話されてはいるが、大きな議論には発展していない（同「業連報No.八七〇〜八九八」より）。

エルダー組合員は、業務委託により、JR時代より人減らしされた職場で、配置されなくなった管理者の仕事までこなしながら、基本賃金（JRから）＋高年齢雇用継続給付（雇用保険から）＋特別支給の老齢厚生年金Ⅱ合計月平均二五万円程度の低賃金で毎月の生活をやりくりしている（他に精勤手当が夏季・年末合計三〇万円）。退職前に比べると、責任と業務量は増えながら、年収は激減している。一方で同じ委託職場には、六〇歳前から若年出向している人（賃金はJR正社員と同じ）もエルダー社員と同じ仕事をしている。

## 定年前と同じ仕事なのに、有期雇用で賃金を下げるのは違法

そこに衝撃的なニュースが飛び込んできた。定年後に再雇用されたトラック運転手が、定年前と同じ業務なのに賃金を下げられたのは違法だとして、定年前と同じ賃金を払うよう勤務先の運送会社に求めた訴訟で、「業務の内容や責任が同じなのに賃金を下げるのは、無期雇用と有期雇用で不合理な差別をすることを禁じた労働契約法二〇条に反する」と認定し、定年前の賃金規程との差額分を支払うよう命じた五月十三日の東京地裁判決である。弁護団は「不合理な格差の是正に大きな影響力を持つ画期

的な判決だ」と評価し、新聞は、「同じ働き方かどうかは、仕事の内容、異動や転勤の範囲——といった事情が考慮される。判決は、いずれも同じなのに賃金に差をつけることは、その程度に関わらず、原則として不合理だとした。こうした考え方が定着すれば、定年後の再雇用者だけでなく、非正社員全体の待遇改善につながる可能性がある。」という（五月一四日「朝日」）。

判決は、職務の内容等が無期労働者と同じ場合に、有期雇用と無期雇用との間に賃金の相違を設けることは特段の事情がない限り不合理だという。その「特段の事情」の有無について、判決は以下の三点を検討し、特段の事情を否定している。

- ①会社の財務経営状況からくる賃金コスト圧縮の必要性があったわけでもないのに、定年後再雇用を賃金コスト圧縮の手段とする正当性はない
- ②定年後再雇用者の労働条件について、労働組合は合意していない
- ③原告の同意について、判決は「組合を通じて、雇用条件に同意できないが、雇用契約書を出さなければ就労できなくなるのでやむを得ず提出する旨を明らかにしていた」として、雇用契約書に署名押印があるからといって「特段の事情」にはあたらない（「労働情報No.九三七」に掲載された宮里邦雄弁護士の「労契法二〇 条長澤運輸裁判」より）

さて問題は、このトラック運転手のケースがエルダー社員にも適用されるだろうかということである。①職務内容等の問題 ②J Rの財務状況の問題 ③労働組合の合意 ④個別エルダー社員の同意などが問題になりそうである。（国労上野反合研）

## 向坂逸郎・岩井章を訪ねる

—「弥次喜多道中」第四弾 信州松本編（上）—

### 社会主義者への旅

滝野、蓑輪の弥次喜多道中を振り返ると、北海道編、宮城編、新潟佐渡編を通して多くの諸先輩方々に出会い、「人の暖かさ」を思う存分感じることができました。改めてお会いできた方々、お世話になった方々にお礼と感謝申し上げます。

滝野さんは「もう年だ年だ、最後だ最後だ。珍道中もね」とわめきまくりです。少しさみしい思いを抱きながら「最後」にふさわしい場所はどこか、想像をフル回転して選んだ場所は「信州松本」でした。とはいっても、「もの忘れ」が激しくなっている滝野さんですから、「次はどこにしましょう」、なんてことも。

信州松本といえば社会通信読者の皆さんはすぐにおわかりでしょう。向坂逸郎が資本論を翻訳するために利用した旅館「扉温泉 明神館」ですよね。松本出身といえれば「総評事務局長」、国労組合員の誇り、岩井章ですね。

二人の社会主義者が辿った歴史に少しだけふれてみたい。同じ空気を感じたといふ思いから、信州松本編となりました。

### 中澤秀行さん

今回も大先輩のお世話をうけることとなりました。松本での道案内は中澤秀行さん

にお願いしました。旅の前、滝野さんから「中澤さんはいつも『共産党宣言』、『経済学批判』、そして向坂先生の『マルクス経済学の方法』（岩波版）を持ち歩き、時間があれば、いやどんなに忙しくも時間をつくって読んでいます。価値論をもっと深く学んでいるんだ。

それだけじゃない、信州の地域史と学術文化、とくに明治の知識人木下尚江については日本一、どこでも講義できる力をもっている。彼は芸術好き、とくに音楽に造詣が深い。松本市の音文では音楽ディレクターとして活躍した。二日間彼とつきあえば頭が混乱するほどの知識が得られるよ。それらを消化するためにも臼井吉見の『安曇野』、『阪本守さんの『叛骨の昭和史』（向坂先生との対話）に目を通しといてよ』との宿題をいただいていたのです。

阪本守さんの本はサイン入りの本をもっておりました。『安曇野』はインターネットで手に入れました。仕事の合間、読んだのですが、結局は時間切れ、白紙のまま中澤さんと相まみえることになりました。

現在は専業農家、音楽にも精通、古典が大好き、歴史人物もよく知り、教養たっぷり、お話が大好き、私を感じた中澤さんです。

中澤さんは『社会通信』一二〇七号（一六一年一月一日）、一二〇八号（一六一年一月五日）に『信州松本と岩井章さん―『小さな花』の「お菜洗い」を連載されています。岩井少年がどんな環境でどんなことを思い成長し、日本労働運動を代表する歴史的人物』になったのかを、あらためて考えさせられる文章です。

滝野さんは岩井章さんとは一九七〇年からおなくなりになるまで、ずうっと一緒にしたから、「印象に残る思い出はなにか」と聞いたところ、「二つある。一つは角栄（田中）さんと仲良かったこと。岩井さん、角栄さんと話した時、『お互いよく似ているなあ』『育ちも』と笑い合った、と話してくれたこと。二つはよく本を読んだ。ぼくが読んでない本知っているだろう、必要と思う本はすべて買っておけなんて。もっとすごいのは岩波文庫『百冊の本』を自ら購入し、ぼくたちが酒盛りしている旅の合間に読んでいた」と。

滝野さんによれば岩井さんは、「一年中講演し歩いているだけでは、頭が枯れる。充電する時間が必要だ」とおっしゃってたとか。出合いの二人目は、信州松本から帰路、甲府駅で途中下車して国労の元本部書記長宮坂要さん。二時間ほどお時間を頂き向坂、岩井両先輩の思い出をお話していただきました。

## 松本城、開智学校

「第四弾 信州松本編」二泊三日の弥次喜多道中始まりです。

六月一六日新宿駅で待ち合わせ、特急あずさ号一二時発に乗車、一四時三五分目的地松本駅到着です。宿泊先は二泊とも創業明治二〇年の「松本ホテル花月」、早々にホテルへ直行です。「去年までは安く泊まれたのに、このホテルも変わったな」と滝野さんから一言。高級ホテルに大変身、外人さんのお客様多数でした。中小ホテルでも集中・合併が相次いでいることの実感です。

少し休憩して国宝松本城を見学です（徒歩五分）。現存する五重天守の中で日本最

古の国宝の城だそうです。その後、岩井章少年の母校「重要文化財旧開智学校」一八七三年（明治六年）開校、明治九年に新築されたわが国最古級の擬洋風小学校建築です。行くには行きましたがさすが弥次喜多道中、営業時間を過ぎていました。外景だけの見学でした。「岩井少年が座った椅子に座ってみたい」衝動にかられた蓑輪は、翌日早朝から再度旧開智学校へ、三〇分待つて一番目の見学者、「この椅子、岩井章も座ったのかな」と思いを馳せながら小さい椅子に腰掛けてみました。タイムスリップです。

岩井章著『ひとすじの道50年』には「松本市の真中に住んでいたから、当然町の一番中心校である開智部へ通っていた。中流階級の子供が多かった。私は尋常一年から四年生まで、この学校へ通った。私は自分でいうのもおかしいが、いわゆる『できる子』だった。四年生の時だけ四番になったが、あとは一番の成績をもらっていた。」と書かれている。詳細は『社会通信』一一〇八号）参照ください。

## 出会い

さて、話を戻しましょう。一八時、中澤さんがホテルにお迎えです。夕食を共にし、中澤さんが知る向坂、岩井両社会主義者の話を聞きながら、お二人を身近に感じることにしました。夕食はお食事処「しずか」、ホテルから徒歩十分のところにあります。中澤さんが若い時代アルバイトで働いていたこともあり、顔見知りのお店です。女将さん、若女将さんともに品のある素敵な方です。一番人気は「おでん」、早々おでんを注文です。「今日は地元の珍味でいこう」「旅の楽しみは食にあり」となり、信州の名物「蜂の子」をいただきました。その後、馬刺し、川魚の塩焼き、飲み物は信州の日本酒、贅沢三味の夕食です。

資本論の論争とはいきませんが「おでん」の食べ方で論争です。三人三様のご意見、「大根だろう、私はまずつゆを飲む」こんな感じでした。どうでもいい話ですが、板前さんは「つゆをまず飲む」というそうです。

「蜂の子」はすずめ蜂や蜜蜂を想像し食べたもんじやないと馬鹿にしたのですが、珍味でした。信州の蜂の子はへボ、地蜂の幼虫を甘辛く煮詰めたもの。私一人でたいらげてしまいました。お代わり欲しかったのですが値段も高級、というわけで次の機会に：でした。それを知っていてくれた中澤さん、翌日、蜂の子おいてる道の駅へ。中澤さんの心づかいを厚く感じました。どれもが美味しかったです。

食事中は中澤さんのワンマンショー（ロシア人ピアニストのアファナシェフの説明から中澤さんと深い関わりのある人物の紹介、松本の歴史として服部時計、新宿・中村屋等の話です。私の知識では追いついていけない内容でした）で話は進み、滝野さんと私は、日本酒の量が進みます。時間の経過を忘れるほど素敵な時間でした。「明日は一〇時にお迎え」を約束して一日目は終了です。（つづく・蓑輪 泰臣）

## ※ 編集者「注」

「お菜洗い」、今私たちは聞きなれない言葉です。岩井章さんが尋常小学校五年の作文です。長野県松本市小学校が編集発行した児童読み物、綴り方の詩文集『小さな花』（大正十年、昭和十年）の第二三号（昭和九年）にのせられています。全文を紹介します。小学校時代の岩井さんをほうふつさせてくれます。

## ◇資料 お菜洗ひ ― (尋五) 岩井 章

授業が終るとあわただしく飛び帰り、かばんを投げ出して、松嶋橋の方へ飛んで行った。朝出がけに母が、「帰つて来てもゐないかも分らないよ。」「どうして」「あの、お菜洗ひに松嶋橋の出水へ行くから」と言った。

やさしい母の顔を思い浮かべ乍ら、あへるのが楽しみに橋の上をすとすと駆け出した。「ああ疲れた。あのよしやぶの蔭にきつと洗っていらつしやるだらう。」よしもう一飛びだと、がんばりをくれて駆け出した。すとすとと橋にひびく音が秋晴れの空に心地よく聞こえた。

「お寒い」と首をしかめて、お菜洗いの女衆達が車をやっかいそうにひいて行つた。待ち受けて見て行くと、なつかしい母の姿が川岸に見えた。「ああ母ちゃんだ。母ちゃん来たね」と呼びかけると、母はさも驚いた様にふりかえつて笑つた。又一元氣出して、黄色い雑草の生い茂つた土手を一散に下つた。

しめりを帯びた川岸の砂の上に、洗われた菜が午後の日を受けて光つていた。

「母ちゃん手伝うかい」「いいよ手にひびがされるから」と母の暖かい言葉に深く感じ入つた。ざぶざぶと菜洗う音が冷たそうに、水の上を絶えず流れて行つた。僕は少し手伝つて車の荷作りの用意をし出した。

母の真赤な手を見ると苦勞さがわかる、きいきいと車が異様な音を立てて動き出した。山の高くに高く積まれたお菜を見て、一年中にこんなに食べるのかしらと驚き乍ら、重い荷を一生懸命挽いて家に向かつた。

『小さい花』第二十三号（昭和九年二月二十五日発行／発行者 松本小学校／印刷所 信濃毎日新聞松本支局）』より

## 思想闘争をもつと大きく、ていねいに

### ― 現代社会の政治と労働運動 ③ ―

#### 現代社会の基本条件

生産手段の私有制にもとづく労働搾取の敵対的対立が、この社会の基本条件である。この基本的条件のもとに生産、分配、交換、消費は支配される。生産された富は生産手段を「独占」する者、資本家階級―今日にあっては独占資本家―が独占する。労働者階級には労働力の対価である賃金が支払われるのみである。

賃金は資本と労働者の力関係で決まる。労働者の階級的組織である労働組合の力が弱くなれば賃金は下がる。労働組合・連合は生産性三原則にもとづく生産性運動に、資本家団体と同じように熱心であるから、連合の「賃金論」は、企業の支払い能力論、「これだけ働いた。儲けはあるではないか。だから賃金にも分配してよ」となる。資本と労働はもともと公平、公正、平等でないものであるから、要求しなければ賃金は絶対的に低下し、不平等、不公正、不公平となる。貧富の差の拡大である。

資本主義の矛盾の拡大は経済の分野だけではない。富と国土と軍事力において圧倒的な力をもつアメリカは、中国に追い上げられるばかりか、イスラムの貧しき民の「絶

望的」な抵抗、生産力を飛躍的に発展させた中国の今の世界秩序は不平等との行動、英国のEU離脱で、さらには蠅螂（とうろう）の斧のようにみえる朝鮮民主主義人民共和国に主導権をにぎられてあわてふためいている。アメリカ国内にも反乱が現れた。共和、民主両党におけるトランプ、サンダースの「乱」である。世界の資本主義の頭のうえに、世界資本主義の危機の深化が、ダモクレスの剣のように、薄気味悪くぶらさがる、これが今の世界情勢である。

### 国家独占資本主義の時代と思想闘争

独占資本、あるいは独占企業が「多国籍企業」という言葉にとつて代えられた。国民経済学派—いわゆる近代経済学派—が、階級対立と階級関係をうすめたり、消え去ろうとしたりするのは、いまの経済・政治体制を守り、維持したいとする彼らの本能であり、とうぜんのことである。マルクス主義者を自称する人から「国家独占資本主義は破たんした」とのドラ声を聞かせられる。悲しく、寂しい現象である。向坂逸郎は『思想攻撃に抗して』(『社会主義』一九六八年三月号)で国家独占資本主義と現代をこう説く。

「国家独占資本主義は、基本的な矛盾が尖鋭化した時代に対応する資本主義の統制である。したがって、この時代には、全力をあげて思想も攻撃に参加する。その攻撃も巧みに扮装して現われる。ベルンシュタインの修正主義は、一九世紀末、独占資本とその生み出した労働貴族を社会的基礎として、資本主義擁護の役割をもったものであるが、国家独占資本主義の時代における思想攻撃は、マルクス対マルクスという巧みな方法を思いついている。進歩的な外貌で、内に激しいマルクスの世界観にたいする憎悪を包んでいる。

ある場合には、マルクス主義の発展という形をとつて、マルクス批判が行なわれる。それは多くの場合、小市民的、知識階級のイデオロギーであつて、社会主義的革命運動から切り離して、マルクス主義の実践的意味を抹殺し、「学問のための学問」として、マルクス主義を取り扱う方法である。『資本論』を「純化」していつて、水と一緒に赤ん坊を流し出してしまふ。取りだした「純理論」のなかには、マルクス主義の精髓はない。それは、『資本論』のなかに社会主義の必然性を発見することを拒否する方法である。『資本論』を死物化する。それが純粹な「科学」の体裁をとるだけに、知識人と小市民とに、社会主義的实践と結合することに怠ける「理論的」口実を与える。

このような思想は、ことごとくマルクス主義に敵対的ではない。それがことごとく保守反動思想であるとはいふことができない。しかし、マルクス主義から、かんじんの牙をぬく。マルクス主義の発展の体裁をとるだけに、社会主義運動に間違つた方向を与え、または、マルクス研究家に「無為」の理論的根拠を教えている。無為とは、いかなる意味においても真の社会科学は結びつかない。マルクス主義とは、理論と実践の弁証法的統一という唯物論を、歴史的發展と、とくに資本主義の分析においてあきらかにし、社会發展の法則性と人間の主導的な歴史的行為の關係を闡明(せんめい)した『資本論』のなかに、社会主義の必然性を理解することである。

いわゆる「純理論」のなかに、社会発展の必然を理解しない「理論」から、直接に革命行動を引きだすとすれば、それは観念論的冒険主義また右翼日和見主義となる外ない。その「純理論」と革命的行動とを直接に結びつけるものはない。もし結びつくとなれば、偶然である。理論と革命的行動は、バラバラに存在する。このような理論は、革命的行動に、方向を与えない。もつとはつきりいえば、革命行動の戦略と戦術を与えない。理論のなかに社会主義革命の必然がないからである。どのような階級が、社会主義革命の主力となりうるのか、どのような階級や社会層が、どのように統一戦線を形成し、どの階級を孤立させうるか、それはまったく知られない。」

## デフレとは慢性的恐慌である

「読売」（六月二八日）が、政府ご用達学者である伊藤元重氏の筆によるちつとばかりおもしろい記事「安倍内閣の経済運営」をのせている。彼の問題意識は①ここに来て広がった財政政策の論議・財政出動をどう見ればよいか、②デフレ脱却のためにはなにが必要か、③日本の財政再建は大丈夫であろうか、である。

彼は次のように述べることから議論をはじめめる。

「この点について考察するため、15年ほど前に盛んに論議された『調整インフレ論』を再度取り上げたい。バブル崩壊後の日本の困難な経済状況から脱却するには、ある程度のインフレが必要であるという議論だった。新聞でも当時、盛んに取り上げられ、私も議論に参加したことがある。まず考えたいのは、財政政策なしにインフレを起こすことができるのかということだ。デフレから脱却するには、大胆な金融政策が必要である。これがアベノミクスの出発点だった。ただ、金融政策だけで十分なのかという問題は、あまり議論されてこなかった。

日本銀行は大胆な金融緩和を行い、世の中に出回るお金の量を増やした。しかし、その多くは、消費や投資につながるよりも、銀行が日銀の当座預金に積み上げるだけの結果に終わっているように見える。

金融政策は重要な役割を果たしてきたが、需要拡大には十分つながっていない。そうした理由もあり、日銀はマイナス金利政策に踏み込んだ。その成果について結論を下すのは時期尚早だが、『金融政策だけで十分だろうか』と疑問を持つ人は少なくない。

安倍は「デフレ」克服には、インフレ政策が必要と、日本銀行の親分を入れ替え、金融緩和にふみきった。伊藤もいうように、日銀は金融市場をお金でじゃぶじゃぶにした。お金の量が増えれば、物の価格は上がる、「デフレ」は克服できると考えたのである。しかし、伊藤もいうように、デフレは改善される傾向にはまったくない。伊藤の論旨は「財政」出動であるが、この点はひとまずおいて、「デフレ」とはなにかについて考えてみる。

「デフレ」とはなにか。広辞苑は「通貨収縮の意、通貨がその需要量に比して過度に収縮すること。通貨価値が高くなり、物価は下落することである」と。一般的には物価が下落することと経済学的には考えられる。物価はお金の需要と供給で決まる。

お金の量が増えれば商品の価格はあがる。これがインフレであり、いわゆる国民経済学派（マルクスとエンゲルスの経済学以外の学派の総称）の「常識」であった。

日銀は毎年八〇兆円のお金を金融市場に流し続けた。しかし、物価は上がらず「デフレ」状況は続くばかりだ。なぜか。

「デフレ」の概念が今と昔とはまったく違ったものになった。「デフレ」は二〇世紀末からすでに二〇年にもなる。だから、デフレは物価の下落とは考えられぬ。長期の不況と考えられなければならない。

次に考えねばならぬのは、なぜ「長期の不況」が続いているかだ。これを「成熟経済」という輩もいる。実際は「過剰生産」といった方がよい。ここからみえてくるのは、現代日本をおおう「デフレ」は慢性的不況、あるいは恐慌状態ということだ。

一九八〇年代まで世界の工業国家はアメリカ、ドイツ、日本、フランスであった。一九九〇年代以降、中国、韓国が、ある産業部門では台湾が参入した。アメリカ、ドイツ、日本の三つの国だけでもそれぞれが世界の総需要を充たす能力をもっていた。そこに中国が参入し、今や日本、ドイツを超える生産能力をもつようになった。だから慢性的な過剰生産よりほかになりえないのが現代の「デフレ」である。

恐慌にさえも達しないほどの膨大な過剰生産！そこに政府・日銀は「デフレ克服」を口実に膨大なお金を金融市場に流し込んだ。利用可能な、投下を求める資本は過剰にふくらんだ。その結果、利子は資本主義史上最底の水準にまで落ち込んだ。マイナス金利で金を貸すから投資しろとの日銀・政府の誘導にも、応じるものはいない。

なぜこうなるのか。貨幣資本家が新しい企業に投資するより、彼の金を寝かせておくことに「利益」を感じているからだ。貨幣資本家はこのことで「今の経済がいかにあてにならないか」、つまり将来への展望を見失ったことの証に他ならない。企業家が純利益を内部留保としてため込んでいるのもそうである。

このことの意味するものはなにか。生産関係と生産力の矛盾が、社会革命を求めるまでに深まったことである。客観的に社会主義への物質的条件が成熟したことである。世界は大乱下にある。メディアはポピュリズムと、喧伝する。正確には大衆の反乱である。

社会主義への道は組織、とりわけ労働者階級に組織された社会主義政党と緊密に結びついた労働組合等の組織である。「社会主義者」たるものは、社会主義の原理・原則を学び、自分のものとし、宣伝することである。  
(伊勢 太郎)

## 英国、EU 離脱交渉のゆくえ

### —ヨーロッパ分離・独立の背景と本質③—

資本主義は変革を求めている。資本主義の発展は、必然的に富の分配の不平等、格差拡大をもたらす。具体的には都市と農村、地域間の格差、富める者と貧しき者の対立激化である。階級社会は生産手段の不平等、非公正を原理とする。生産された富は生産手段の所有者、支配階級のものとなる。分配は支配者と被支配者の力関係で決まる。

こうした階級社会の生産関係にある生産、分配、交換、消費の社会法則がそうするのである。

資本は競争を、したがって資本の人格化である資本家は自由競争、自由貿易を求める。資本主義の発達には自由競争の結果である。保護貿易は遅れて資本主義に参加した「後進国」の政策としてあった。保護貿易主義は今もある。しかし過去がそうであったように、かならず自由貿易が資本主義社会にあつては勝利者となる。

現代の自由貿易主義が新自由主義、グローバリズムである。「新」の姿はなにか、独占資本主義による自由競争、グローバリズムは社会主義崩壊による資本主義の世界市場再編成である。

独占資本は、それより小さい独占資本、中小資本家、中間階級（農民・小零細企業主）を搾取し収奪する。独占資本は肥え太る。その他の階級は、全面的な窮乏化が襲う。それらの総合的な結果が、英国のEU離脱、反EUの傾向の拡大である。

英国のEU離脱を「専門家」は「二十一世紀の暗雲の象徴」「大衆反乱」、「支配層の大衆へのべつ視」の結果という。さらに英米型資本主義（新自由主義）の終焉、グローバリズムの転換点と、資本主義の未来は「明るくない」との論があふれている。

この本質はなにか。生産関係と生産力の矛盾が限界点に達していることだ。世界史は資本主義から社会主義への「革命的転換」を求めている。それを実現するのが労働者階級の組織である、社会主義政党と労働組合だ。独占資本とその政治的代理人である政府の思想攻撃でそれら組織は弱体化された。労働者が「市民」とされた。労働者がどこでも過半を占めているのである。

**交渉の焦点** 英国のEU離脱は労働者階級の「反乱」であった。労働者階級の党・労働者は労働者階級の「気分」を読めなかった。現代の階級闘争の象徴である。これからどうなるか。

EUの中心国は英国の離脱でドイツとフランスの二国となる。EUの主張は①単一市場を維持・発展、②原則は人、モノ、カネ、サービスの自由貿易、③移民の自由は譲れない、④英国の離脱交渉は離脱通告のあと。

英国労働者階級は「移民を制限せよ」。新内閣（メイ首相、七月一三日発足）は、二つを重要項目とせざるをえない。一つはEUからの移民制限、二つは貿易、サービス分野での自由貿易の維持である。

**交渉は来年から** 交渉はこの二つをめぐっておこなわれる。EUはこれから始まる交渉に①事前交渉（離脱前）には応じない、②できるだけはやく案をまとめてもつてこい、③混乱を長引かせずはやい結着を望む。

英国は①通知は年内におこなわない、②十分な準備したい、この意図は離脱案つくるには最善の条件、国民の結末、未来像をつくり、③通告し、交渉したい。

**活気づく投機集団** 交渉はどうなるか。EUと英国の交渉は来年から始まる。EU条約による交渉期間は、二年で結着しなければ離脱となる。その時、英国、EUはどうなるか。予想はつかぬ。混乱は長引く。

交渉のテーマは何か。第一に移民の制限、英国はこれを求める。第二はEU機構のあり方、EUは三万の官僚をもつ「国家」、加盟国の政策を決める。EU予算は加盟国GDPの1%、その分担率は独二二・二%、仏一六・八%、伊一二・三%、英九・一七%だ。ここにEUの力関係がはっきりと示される。

英国がEUからぬけて、EU、世界経済は混乱するか。国際機関が大騒ぎしているほどではない。英国は世界の金融センターといわれる。ユーロには加盟していない。混乱でポンドは下がる。ユーロはポンドほどには下がらない。EU内での英国の金融業の占める比率は二五%、独一五、仏一三である。

英国の競争力は強くない。ヴェニススの商人のシャイロック流の高利貸し資本主義国であるからだ。英国は米・中・日・独に次ぐ世界第五位の生産力をもつ、しかし、世界五百社に名を連ねるのはわずか三〇社。金融業（保険・銀行）一〇、資源五、インフラ（通信・ガス・電力）五、小売五、製造業はタバコ、航空、船舶、薬、防衛の六。過去の「世界の工場」のおもかげはない。金貸し業G | G'（貨幣の売買での金儲け）が、金融センターの姿である。

英国のEU離脱でいちばん活気づいているのが投機資本だ。「デーヘンだ」と為替、株式相場は乱高下。円は今も一〇〇円台から一〇六円台をくり返す。

日本とEU 日本とEU、英国の関係はどうか。日本企業は英国を拠点とし、EUに商品売る。英国に一〇二一社（うち金融・保険八九社）が進出、一〇・八兆円投資し、〇・七兆円をかせぐ。日本企業にとつて、英国への投資はEUへの架け橋としてあった。英国はEUに参加する。英国に資本投資は英国でつくったものをEUに無関係で自由に売れる。独占企業はこの自由を楽しんだ。

英国が離脱した場合、独占資本に与えられた特権がどうなるか。日本経団連が今、もつとも心配することだ。（編集部）

## ◇ 読者からのおたより ◇

パソコン教室 永い間お世話になり、ありがとうございます。ホームページ活用のため八月からパソコン教室に行きます。（兵庫・三浦正巳）

編集部より うれしいです。お手数かけますね。

五勝一敗 参院選、東北は五勝一敗、震災、原発事故の対応では置き去りにされ、「トリクルダウン」は「どこの話」という経済実情、山形は候補者の実力もあり圧勝。とはいえ機関誌拡大は容易ではありません。私も創刊の初期から購読、指針を与えてもらって感謝です。（山形・東海林和夫）

編集部より 長い間、ありがとうございます。ホームページよろしく。  
残念 創刊以来、今日まで「社会通信」とともに、いろんな面で学ばされてきました。「紙」がなくなるのは残念です。残金はカンパです。（鎌倉・大友賢一）

編集部より HPの内容は充実させていきます。これからもよろしく。カンパに感謝です。  
「時代遅れ」の生活 最後の送金となりました。息子に「ネット」を切られまして時代遅れの生活をしています。平和と民主主義を守り抜く大切さ、社会の見方」を学ばせていただきました。本当に永い間ありがとうございます。（岐阜市・河合国広）

編集部より 「ネット」復活を！「紙」は十月一五日で終えますが、HPはさらに充実した内容にしてゆきますから。

選挙 参院選に続いて東京都知事選挙、思うようにいかない選挙結果。（長野・山浦隆芳）  
編集部より 波乱の時代の幕明けは近いですよ。今号、参考にして下さい。

